

# 特集 音楽教育と電子テクノロジー —「共有」と「発信」を目指して—

特集の趣旨 ..... 深見友紀子・永岡 都・ 4

## ■第1部 音楽教育と電子テクノロジー，その現状と課題

学校教育における情報化の動向と課題 ..... 堀田 龍也・ 6

### デジタル教科書の現状と今後

— 音楽科のデジタル教材活用を中心に ..... 今井 康人・ 14

### 音楽デジタル教科書の改良に向けた提案

— 韓国視察，日韓デジタル教科書比較を通じて ..... 深見友紀子・ 22

小学校音楽科教育におけるICTの関わりと活用法 ..... 初山 正博・ 27

## ■第2部 教育現場と電子テクノロジー

### 音楽鑑賞指導におけるICT活用例と

(公財)音楽鑑賞振興財団の取り組みについて ..... 林田 壮平・ 34

### 〈実践報告：私のICT活用術〉

— 電子黒板を中心に ..... 小作 典子・ 40

— 電子黒板，キューブミュージック2の活用例 ..... 茂木 日南・ 42

— 情報提示のあり方とコミュニケーション ..... 萬 司・ 44

— 電子黒板と機材の組み合わせ ..... 田中館裕美・ 46

— 鑑賞指導の教材提示について ..... 徳田 崇・ 48

— 電子黒板を中心に ..... 平尾 豊・ 50

特集投稿（報告）モバイルSNSを活用したピアノ学習の試み ..... 田中 功一・小倉隆一郎・ 52

### 特集投稿（報告）音楽療法におけるテクノロジーの活用

— 2000年以降の文献レビューを中心に ..... 一ノ瀬智子・松本佳久子  
竹原 直美・渡部 信一・ 60

### 特集投稿（報告）小学校現場での音楽づくりとコンピュータ活用をふりかえって

— こだわり続けた「記譜指導」 ..... 國分 俊彦・ 66

### 特集投稿（報告）大学の授業におけるコンピュータ音楽の実践

— Linux (ubuntu) 環境を活用して ..... 森田 信一・ 70

## ■第3部 音楽教育の「未来形」を考える

### 特集投稿（提案）情報化，まだ進めますか？

— 技術発展に伴う概念変容に音楽科教育は対応できる（／すべきな）のか  
..... 井手口彰典・ 77

楽器メーカー 5社に聞く

— 音楽教育と電子テクノロジーの過去／現在／未来

..... 岡 雅章・鈴木 広則・西村 武臣  
 荒倉 敏行・小林 誠・坂巻 匡彦  
 押木 正人・剣持 秀紀・深見友紀子・ 87

音楽教育における電子テクノロジー活用実践

— 音楽科教育を時代に合ったものにするために ..... 鈴木 正樹・108

学校音楽教育における電子技術導入の未来形

— オープンソース, DIY, DIWOと新たな音楽コミュニティの可能性

..... 中西 宣人・松村誠一郎・荒川 忠一・115

特集を総括して ..... 深見友紀子・永岡 都・126

■自由投稿

(報告) 「内」と「外」をつなぐ柔らかな耳

— 「音のワークショップ」,あるいは気づきのプロセス ..... 今井 裕子・130

(報告) フィンランドの義務教育における音楽科カリキュラム ..... 阿波 祐子・142

(報告) 聾学校における音楽教育の実践

— 「目で・耳で・心で聴く」子どもたちを育てる ..... 末成 妙子・154

(論文) 音楽教育を支援する学校図書館の機能

— 1950年代におけるレコード資料の取扱いとその活用 ..... 杉山 悦子・166

(報告) スウェーデンの基礎学校における音楽科教育の動向

— 2011年改訂音楽科コースプランを中心に ..... 松本進乃助・178

(報告) コダーイの教育思想とハンガリーの音楽実践から

21世紀の音楽教育を展望する

— 第21回国際コダーイ・シンポジウムに参加して ..... 尾見 敦子・永岡 都・189

『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定・201

『音楽教育実践ジャーナル』vol.12 no.2 (通巻第24号) 特集・原稿募集・202

編集後記・203

<表紙・中扉写真> 左より時計回りに「音楽帳」(カワイ), 「ルナシー」を演奏する子どもたち(ローランド), 「教育用オルガン」(スズキ), 「カオシレーター2」(コルグ)

# 【特集】 音楽教育と 電子テクノロジー —「共有」と「発信」を 目指して—



2013年度公開講座「子どもと電子楽器」  
(京都女子大学児童学科)

## 特集の趣旨

電子テクノロジーはその登場以来、音楽とつねに密接に関わりながら、音楽の在りようをダイナミックに変容させてきたといえるでしょう。電子テクノロジーによって、音楽は記録され、再生されるものとなり、レコードや公共放送を通して我々の周りに遍在するものとなり、さらには近年のPCの普及や情報テクノロジーの進化が、音楽の創造や受容に対する人々の意識を変革しつつあります。

ふり返ってみれば、音楽教育、とりわけ学校の音楽科教育は、かつては電子テクノロジーの恩恵を最も大きく受けている分野でした。レコードやテープを使用していた時代から、1990年代のDTM全盛期まで、音楽の教師たちは「視聴覚機器」「電子楽器」といった形で様々な機材を使いこなし、積極的に電子テクノロジーと関わってきました。

しかし、2000年代に入って「情報テクノロジー」が日常化するようになった頃から、音楽教育の現場と電子テクノロジーの蜜月に変化が起こり始めました。他教科でのICT活用報告が活発に行われる一方で、時代に逆行するように、音楽科教育はICT化の波に乗り遅れ、社会の変化から取り残されているように見えます。それが音楽教育の固有の領域（例えば、楽器演奏のアコースティックでフィジカルな側面）とデジタル機器の動作環境が相容れないことに起因するのか、あるいは個人の力ではどうしようもない社会構造や制度的な変化に起因するものなのか、はたまた音楽教師の意識の問題なのか、あらためて考えてみる必要があります。

そこで、本特集では、2013年時点での音楽教育と電子テクノロジーに関する情報を収集し、課題を共有した上で、音楽科の特性を生かす電子テクノロジーの活用とはいかなるものか、今

後の方向性を考えることをテーマに掲げました。そのためには、小中高の音楽教育現場や大学の研究・教育機関だけでなく、音楽教育を取り巻く関連分野から多角的にアプローチすることが必要と考え、情報教育の研究者、教科書会社の編集者、楽器メーカーの開発者など、非学会員の方々にも広く協力をお願いしました。そして、それらの情報にもとづいて、音楽教育と電子テクノロジーの過去をふり返り、現状を見つめ、未来を考えることを目指しました。

特集全体は3つの小テーマで構成されています。第1部「音楽教育と電子テクノロジー、その現状と課題」では、情報教育、教科書に代表されるコンテンツ開発、ICT活用に関する概説を提示し、情報テクノロジーが社会全体を新しく組み替えていく中で音楽科教育が直面する様々な課題を明らかにしました。堀田龍也氏には「教育の情報化」と教科指導におけるICT活用について基本的な解説をしていただき、我々の共通認識の土台を作っていただきました。また、今井康人氏には「デジタル教科書」というフィルターを通して、ICT教育推進の背後にある国や自治体の施策、デジタルコンテンツの今後について忌憚のない意見を披瀝していただきました。さらに、初山正博氏には、学校現場においてなぜ音楽科が情報化の波に乗り遅れたか、その要因を探るとともに、ICT活用の可能性を提示していただきました。

第2部「教育現場と電子テクノロジー」では、現時点でのレポートとして、小・中・高等学校、大学の教員養成、保育養成で展開されている様々な教育実践を紹介しました。林田壮平氏には鑑賞指導に活かせるICT機材とその活用方法についてまとめていただき、それを受けて現場の6人の先生方から電子黒板を中心とする授

業実践「私のICT活用術」を執筆していただきました。その後続く4本の特集投稿は、SNSを利用したピアノ学習、音楽療法分野の動向、1990年代に盛んだったDTM（デスクトップミュージック）の流れが、現在の小学校と大学の授業においてどのように変容したか等、電子テクノロジーと音楽教育に関わる様々な局面を描いています。その中で気づかされることは、社会全体の情報化の波が、音楽教育の現場に光と影の両方をもたらしたという事実です。

これらの展開を受けて、第3部「音楽教育の『未来形』を考える」では、これからの学校音楽教育が進むべき方向を展望しました。旧来の音楽教育の枠組みを護るために「情報化」を諦めるのも一案だとする井手口彰典氏の投稿提案から、鈴木正樹氏や中西宣人氏のように、電子テクノロジーが媒介する新しいインターフェース（楽器）や音楽コミュニティの誕生が音楽教育に活路を開くという意見まで、両極端ではありますが、真剣に考えるべき問題でしょう。

そして、最後に特筆したいことは、今回の特集に際し、日本を代表する楽器メーカー5社のインタビューを実現できたことです。編集担当からお願いした質問の中には、各社の製品開発や企業戦略に関わる事項も含まれておりましたが、業界トップの方々から可能な限り情報を開示し、音楽教育の現状と未来について熱く語っていただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。と同時に、教科書会社も含め、今回の特集にご協力いただいた企業の方々の期待と信頼に、本学会もこれから応えていく責務をひしひしと感じています。本特集が音楽教育と電子テクノロジーの様々な課題を再考するきっかけとなることを念じてやみません。

(深見友紀子、永岡 都 記)